研究計画書

台湾語と日本語のシンタックス（統語）における対照研究－受身形、使役形、受益表現、時間表現を中心に

1. 研究動機

わたしは台湾語母語話者である。大学時代から始めて日本語を勉強している。実は大学時代で一週間一回ぐらい日本語授業を受けて少ない日本語を学んだ。主に大学院時代で塾で多く日本語を学んていた。日本語を勉強しているうちに台湾語と日本語の syntax（統語）において共通点と相違点があると発見した。

日本語の受身形は四種類がある。(1) 主語は動作を受ける者あるいは物である。行為者は動作主である。例えば：わたしは先生にほめられる、コップは弟に割れられるなど。わたしは先生にほめられる例では主語であるわたしは動作を受ける者ということである。先生である行為者は動作主ということである。コップは弟に割れられる例では主語であるコップは動作を受ける物ということである。行為者である弟は動作主ということである。(2) 動作主は重要ではない。例えば：兵庫県で甲子園大会が行われる、記事を書かれるなど。兵庫県で甲子園大会が行われる例では誰か野球試合を催すのが重要ではない。重要は甲子園大会は高校生が野球をやる最高舞台である。甲子園では高校野球を指すのが知られている。主催者は重要ではない。記事を書かれる例では誰か記事を書くのが重要ではない。この記事は事実と発生した事を語る。(3) 迷惑にかける。例えば：出掛ける時友達に来られる。雨が降られるなど。出掛ける時、友達に来られる例では出掛けるのに友達が来る。そうすると、買い物、用事など時間が遅れるのであの日のシケジュールが乱す。雨が降られる例では雨の日でも用事がある、出掛けるが面倒くさい、あるいは出掛ける時、晴れても途中で雨が降る、傘を持たなくて困る。(4) 被害に遇う。例えば：お金を盗まれる、かばを奪われたなど。自分で被害者を強調する。盗難でお金とか物とかを失う。

台湾語の受身形 hōo は三種類がある。(1) 主語は動作を受ける者あるいは物である。行為者は動作主である。例えば：guá hōo kàu-siū o-ló（私は教授にほめられる）主語である私は動作を受ける者ということである。行為者である教授は動作主というである。(2) 迷惑にかける。例えば：hōo i tsàu khì（彼に逃げられた）、hōo i khuàN tiȯh（彼に見られる）など。彼に逃げられた例では彼を捕まるところに彼は逃げた。彼に見られる例ではこの物は他の人に見られたくない、うっかり他の人が見る。(3) 被害に遇う。guá　hōo i phah（わたしは彼に殴られた）、phue-pāu hông tsiùN khì（かばんに盗まれた）など。わたしは彼に殴られた例では彼はわたしを殴ってわたしはけがした、体で傷があった。かばんに盗まれた例では誰かはわたしのかばんを盗む。わたしは経済的損失に

遇った。この状況で自分で被害者を強調する。

したがって、台湾語の受身形 hōo は日本語の受身形で主語は動作を受ける者、迷惑にかける、被害に遇うのに対応する。

日本語の使役形は一般には他者に「～するように強制する」ということですが、それ以外にも許容や放任、誘発などかなり広い意味の広がりがある。例えば：部下にやらせる（強制）、この本は人々にいじめの問題を考えさせる（誘発）、親は子供たちにやりたいことをやらせた（許容）など。「歩く／走る／行く／来る／帰る」や「驚く／悩む／笑う／泣く／喜ぶ／悲しむ／苦しむ」などの感情や感覚を表す動詞などが多く使う。例えば：兄が妹を泣かせたなど。

台湾語の使役形 hōo は行為者が誰かに何かを強制するとか誰かが何かをする事を許可するとかいう意味がある。例えば：guá hōo hȧk-seng khì tsò（学生にやらせる）（強制）、hōo gín-à kah-tī suán-tė̍k（子供に選ばせる）（許可）など。ほかに感情を表す動詞を使う。その状況では kā を使う。例えば：guá kā i iōng khàu（わたしは彼を泣かせた）など。

台湾語の hōo は日本語の使役形で強制と許容を表すという意味に対応する。台湾語の kā は日本語の使役形で感情や感覚を表す動詞に対応する。受身形と使役形の説明をまとめる、つまり、台湾語の hōo は日本語の受身形と使役形に対応する、台湾語の kā は日本語のに対応するということである。

日本語では「～てやる、～てあげる、～てくれる」によって受益表現を表す。受益表現はその行為をし、それによって恩恵・利益を受けるのを表す。例えば：お母さんが子供にご飯を作ってやる。子供の手を洗ってあげるなど。お母さんはご飯を作る行為によって子供に恩恵と利益を授与する。子供の手を洗うことによって子供は恩恵を受ける。台湾語の thè は受益表現を表す。例えば：guá kā tsuì thè lín sio lâi（わたしは君たちに水を入れてあげる）guá thè sen-sei kuāN mih-kiāN（わたしは先生に荷物を持ってあげる）など。水を入れる、荷物を持つ行為によって相手に利益を与える。thè という助動詞は動詞の前に来る、相手がこの動作で受益するのを表す。台湾語の受益表現は thè だけである。台湾語の thè は日本語の「～てあげる、てやる」に対応する。

時間表現（テンス）で台湾語と日本語はテンスがある。日本語は「～たことがある」によって物事を経験したのを表す。例えば：わたしは東京に住んていたことがあるなど。「～たことがある」によって過去何年間で東京に生活した経験を表す。台湾語 bah は物事を経験したのを表す。例えば：guá bah khì kuè アメリカ、guá　ū　khì　kuè アメリカ（わたしはアメリカに行ったことがある）など。Bah という助動詞は動詞の前に来る、何年前にアメリカに旅行など経験を表す。あるいは ū＋V＋kuè は経験を表す。ū＋動詞 khì＋kuè はアメリカに行った経験を表す。台湾語の bah と「ū＋V＋kuè」は日本語の「～たことがある」に対応する。日本語は「～ている」によって動作進行中を表す。例えば：ご飯を食べているなど。「～ている」によって食べるのが進行中を表す。台湾語の

tng-lėh は動作進行中を表す。例えば：guá tng-lėh khuàN tsheh（わたしは本を読んでいる）tng-lėh は動詞の前に来る、この動作は進行中を表す。したがって、台湾語の tng-lėh は日本語「～ている」に対応する。日本語の過去形は動詞、名詞、形容詞のた形である。たとえば：きのう映画を見たなど。動詞た形によって映画を見ることが発生した。台湾語の動詞＋kuè は過去形である。例えば：tsa-mê khì kuè tôo-su kuán（昨日図書館に行った）。kuè は動詞の後に来る、この動作が発生するのを表す。台湾語の動詞＋kuè は日本語の過去形に対応する。

2. 先行研究

楊凱榮によると「日本語の受益構文の表現形式は『～てやる、～てくれる』といった受益標識によって表す。行為による相手へのものの提供にとどまらず、さらに利益の提供及び恩恵授与という語用論的な意味が新たに生じているのである。受益標識の有無は動詞項とは関係なく、実質的には話し手の視点を反映する恩恵授与の有無と関係している。日本語の受益構文に用いる受益標識は話し手の主観的な視点を明示する語用論なものである。」ということである。

吉川によると「台湾閩南語（台湾語）の書記では、単一の文字種から成る表記体系としては、漢字のみの文書がやや少数ながらも一定数確認された。そして、ラテン文字のみの文もやや少数であった。多くの文書は漢字とラテン文字を混在させた表記体系を取っており、概して漢字が母体であった。ラテン文字は台湾閩南語専用の表記法「白話字」（教会ローマ字）として使用されている」ということである。

樋口によると「台湾語の Leh は動詞として単独で使われることはないが、動詞の前に置かれて動作の進行・持続を表す副詞 teh（leh の発音）はその弱化形式）として用いられる。例えば：I tsit-má teh khuàN tāin-sī（彼はいまテレビを見ている）」ということである。

陳麗君によると「台湾語『ū＋V＋kuè（経験）＝日本語「人は V た形ことがある」』。台湾語『ū＋V』は動作の経験を表すのが『kuè』と共起して、ある動作の経験の有無について話者の確認や態度を示す。それに対応する日本語は『V たことがある』である。台湾語の例：lí ū khuàN kuè　bôo（見たことがあるか）lí　kam　ū　tī　Ko-hiông　chē　kuè 捷運（高雄で MRT に乗ったことがあるか）」ということである。

したがって日本語の受益表現は台湾語で対応する言葉がある。台湾語の副詞 teh は動作の進行・持続を表す。日本語の「～ている」は同じ用法がある。台湾語 ū＋V＋kuè は動作の経験を示す。日本語「V たことがある」に対応する。

3. 研究目的

対照言語学は共時的に研究する。現在語の比較を中心である。ある一時期のラングの状態を共時態（synchrony）と呼ぶ。共時態を扱う分野を共時言語学

という。台湾語と日本語を対照する研究はいまのラングの状態を扱う。つまり、同じ時期で台湾語と日本語を比べる。これは共時的に研究する。台湾語と日本語での普遍性と共通性を探す。そして、台湾語と日本語の視点が違うのを探す。

4. 研究方法

言語データは話し言葉の言語データと書き言葉の言語データに分ける。話し言葉の言語データは実際の場面でどのように使われているかを取材する。話し言葉を記録、調査する。話し言葉の言語データアンケート調査（質問紙調査）によって実際の会話の採集特定の文法事項や現象に特化した調査。言語調査の協力者は母語話者であることが必要である。調査を開始する前に母語話者であるか確認する必要がある。本研究では四十歳以上の台湾語母語話者を対象にインダービューする。原因は台湾でかつて「国語運動」を進めたことがある。政府はみんなに国語を話すのが要求した。今の台湾若い人は台湾語をペラペラ話すことができない。協力者は中高年齢層の人にインダービューするからです。

書き言葉の言語データは書き言葉の資料から集める。本、雑誌、新聞などを読んでいるときに目にした用例を記録する。これは確実な方法であり、一定の基準に従って用例を集めることで一般化に近づくこと画で来る。もう一つコンピューター上で検索する。コンピューターのテーダベースはさまざまな言語資料がある。台湾語と日本語のテーダベースは国立国語研究所と台語信望愛と白話字サイトから書き言葉の言語データを検索する。

5. 研究意義

対照言語学は日中対照研究、日米対照研究、日韓対照研究など論文及びレポートが多い。それに比べて台湾語と日本語の対照研究に関わる論文及びレポートが少ない。台湾語と日本語における対照研究は新しい分野。そして、いま、台湾語を学ぶ日本人がいる、台湾語と日本語における対照研究によって日本人に台湾語を学ぶのに協力する。

6. 参考文献

吉川雅之(2013)『ウェブサイトにおける音声言語の書記』「ことばと社会－多言語社会研究」、pp12-40
陳麗君(2012)『台湾語「有＋ＶＰ」と日本語「有＋テアル」との対照研究－構文・意味を中心に－』「言語の普遍性と個別性」第 3 号、pp35-73
楊凱榮(2009)『中日受益表現と所有構造の対照研究』「中日言語研究と日本語教育」第 2 号、pp1-12
樋口靖(2008) 『台湾閩南語における状態補語の用法』「東京外国語大学論集」７７号